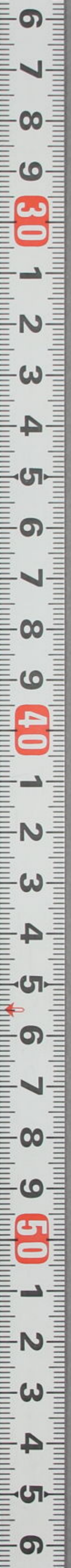


由商德子  
全

4 曾 5

487



南齋先生遺筆



山本賦雲藏書



增  
487  
卷

素延 喃劫 王南佐 熾川鉅州 茶寮 烏絲欄 王羲之 竹文 和音心方  
雲舟三統

功高随平



をふししよを祝壽乃事そ他  
法人と能くをを知るいふ日本  
もても此事あるなりとなれども  
大なる其本人より是を人より  
さしし竹の其を以ていふ餅を  
つて或は未飯なりといふを重亮是

をくづりしを親屬あつありて  
めさしなむらふてをりて人々  
家々ましし料理乃評議又誰が  
蘇維つうご彼がらうひ是が  
大食大敵又彼が立腹是く  
和をなししとゆやらさやら  
早事よ志りした勝をてはすりて

ちと茶碗をとりてなすりて  
て七十を八十おと乃名款名を  
しをとりあつめを上げ名あり  
詩人文人なまのあつめ錦繡  
をあつめて是もめてし  
なすりて名紙や唐紙をあましく貴  
後表具乃工夫のみ志けの雛子。

舟名何しき名をなすはよしうり人の  
子孫の光榮をよこく盛うるべしな  
る事ありし先生を  
公唐土より朝延乃給紳法主王公  
大旨しやありしあり七十五韻百  
韻乃長篇ふさやうりぬん船子  
編子乃和貴念をとりりく外は

應しん壽堂よりうりぬん壽章を  
いふものも大なりとんす乃ありし  
を擇ひて金泥を是を書しぬん  
はふも昔ハん船よりこししゆ紀  
奪より母の事なり如京祇園山と  
いふものかこししゆりしり  
いふものを及れ多く官人文人

おのの壽章なりけり ゆき あ こ の お の  
元先生かろうまうり 四十自らり  
ころしと深末大坂今らのらり  
堺ら不ら忍らがらしらのらり 壽 を 祝  
し の 人 を あ ら し た ら お の 子 を い ふ  
そのならしして親屬をなく た ら  
骨らやら 骨 や ら を れ ぬ ら

なれたらむとかくと大槻人なり  
諸君大まといふらうも書きた  
ならしひらしらならしらのらり  
あらしらなられら ま ら し し の ら ぬ  
幸ら ま ら し う ぬ げ て あ り ん と  
酒ら を 乃 も 不 思 儀 七 十 一 ま  
いら し ぬ び ん も 目 を な ら し

丈夫より人より乃鐵事を  
如せしむるなるしく一人や二人乃  
ちしくそは安業かあしとけゆる  
ましくあふなりけ上ハかしのと  
世に渡せは唐紙をいとかなむる事  
なる唐土のそやうをえしむま  
るものそらふんあしんかひをた

くましくあまのむらむらむらむら  
めそししくかきしりあむらむら  
なるむらむらむらむらむらむら  
るものそあまかきしりあむらむら  
いぬしむらむらむらむらむらむら  
かきしりあむらむらむらむらむら  
つらむらむらむらむらむらむら

子受字能之。心をつげ以て得ん事  
九十と百と出づ。乃ち秘法を名に  
常。君有し之。社中乃ち人々  
先を乃ち之らふ。叶ひて長原  
乃ち之れあり。之れ之れ

之れ何れ之れ

不問長生術。猶願其事

人。今年。七十。福。至。孫  
身。

人々。二。求。者。福。至。與

永安。今。禮。心。事。一

食。九。是。丹。



息心古稀 何意

すまゝ文字相撲なる二字す

ま乃音ありや識者所へ

唐土よしれにありき

けりなしといふ角は

ふ角ハあらき文字

なりちからをあらきいから

るなり日本よ久しき

なり惠美乃宿祿なり

ふ惟仁惟高乃二王子位を

すまゝ乃勝負えん

ハつて是を正紀と考ふ

頼朝の河津と



きやをとりんとせし。目釘  
おてかをなうし。俗不運と  
りみゆし

唐土人乃議。將相をなし  
り。よとあり。天地人三才と  
又中より。いなる賢者あり  
と。うのちる。ゆき。く。は。ら。ぬ

を。一。た。ら。ぬ。あ。り。し。の。朝。廷  
乃。扶。助。と。な。さ。せ。ら。る。ふ。其。勢。は  
し。牛。ひ。と。一。男。國。乃。將。と。な。り  
相。と。な。り。た。ま。ふ。一。む。り。し

より。多。の。さ。と。な。り。宋。の。王。禹  
併。な。も。粉。な。や。乃。僕。な。り。官

府より物をとむるを死諸  
官人聯句——竹の鸚鵡善言  
争似鳳。とらふをさし禹  
悔すくま蜘蛛雖功不如蚕  
とつけ竹のあへ一産驚とて  
そ乃先生士安是を稱羨し

子文章満腹といふもの  
を朝廷の清きとよ及出身  
して刺史縣令となり竹の日本  
まぐもこれ禹悔をさしるハな  
し孝経より立身揚名とて  
その孝乃本欲をさし竹

まねまてふら及ぬまじしれ  
とも百名也二百在りりま  
なるあしきものあ〜ん  
随ふ出力後書寫の字の功  
をうつとみづうろ日月を因  
過すまじしち〜なるり

学とん事ハ天地日月星辰山  
川草木風雨霜露雪五雨散  
と雨務と雨段を人乃事ハ上と五  
侯大夫より士農工商位凡乃と  
くひうりて流まで上中下乃品  
位と志りと差別あはしを辨

別一 五れより禽獸鳥魚あ  
らゆふ虫類までを大概八本  
草一 能毒まで詳し此せより  
これに詳し是は事一なる利階  
蟻相逢如偶語。なとりふ自あり  
蟻のしつごふと能く見ゆへたと

一 蚯蚓をありの見付されば事  
速きらばはるるふしけあらは  
るるはるるはるるをきし  
届け先ツ又分乃蟻四り以ては  
るるし蚯蚓乃大小場ふ乃高低  
險阻旦平乃地形なと見ゆりの

此ノ之海あな乃あり其きしと  
けし海越えし列を定まあす  
乃ありゆく行列乃以舟甚と正  
し蚯蚓乃あり主領乃蟻と  
及て四五六さ乃ありとと蚯蚓有  
終る乃産ひきくくの丸固をさ

海やうきくやう此きやうありと  
れうの懸掛のかりんひまゆ  
たう空しく乃すしたるいさ  
とあまうりし事あしゆ乃ありと  
見届し蚯蚓の望みす先をゆく  
宰領とる海と海城の大せい乃

かろ紙又書くありきんしとたり  
まのほ椽椽人の働る似たりい  
つとも義あはるるなり又の昔  
文字を以てくらしむるはとてたや  
以虫我あはるるを感ずん  
蟻と名しる事之ゆ

あまのうらハ家ニ此信れ  
あやうになれは早きは臨  
人南氣夢我説く  
拙く受書作り一通此種  
古は州人本なりと  
すむるふ書なりを奉



五十九 古 清 和 名 如 ま と  
用 ゆ く

茶 西 國 法 喫 茶 乃 記 大 徳 念  
る え ん ゆ く 福 林 え 茶 堂  
此 規 約 を し あ る を あ り て  
會 多 派 此 時 茶 板 と り み 哉

打 て る は り は 茶 板 紙 を  
ら せ 此 鑑 或 ハ 石 磨 茶 堂  
茶 堂 は 茶 堂 の し り い て 出 る  
茶 堂 の し り い て 出 る  
茶 堂 の し り い て 出 る  
茶 堂 の し り い て 出 る

五十九 古 清 和 為 如 是 也  
用 傳

茶 西 國 法 實 茶 乃 記 德 念  
此 規 約 之 也 云 云 亦 是  
會 多 記 此 時 茶 板 之 事 哉

打 之 也 云 云 以 茶 板 紙 之  
ら せ 此 罐 或 八 石 磨 之 也  
茶 之 事 云 云 云 云 云 云 云  
云 云 云 云 云 云 云 云 云  
云 云 云 云 云 云 云 云 云  
云 云 云 云 云 云 云 云 云  
云 云 云 云 云 云 云 云 云

われも持志するは何れも如神はし  
るや今はなきしきれゆも  
花よりかまじかあよふ系  
成るは花いけぬる系  
湯よりくりとあまの事  
けりゆるとみくゆり

烏絲欄 日本 系 けりゆり文字計。

よりゆりものなけいを下に書くな  
るふりし

**永** **和** 九年よりゆりの達考なるえん書を  
出でゆりなれた未熟なる記ふりて大  
概なむひりすしをきりふかり丁

寧よし是なる者厚増よししまし  
る自利他よしありよしよし  
自然とわれは徳ありて人何をなく帰  
崇しゆるなり大教今乃右清國  
乃よしと康熙皇帝とよし  
國の先聖王なりよしよし上の

聖徳とよしよしし  
あよしよし事多し康熙  
字典佩文齋書画譜欽定四經など  
よしよし大部よしよし  
太平乃御代に生れら大幸右乃書  
本大概よしよしなりよし全

眼を益す事、費しし竹、  
次第、右乃書本を、  
左、是を一代の大業とし  
又後乃思孫、  
むし、  
多、  
多、

なるは、  
元乃、  
を、  
治、  
し、  
人、  
麝香、

あれは自然の聲に随つて  
うまう

乃會稽乃内史右將軍王羲  
之永和九年乃脩禊帖天下  
一乃法書とす乃名高と事  
乃三月三日水濱に集る

酒を好む詩を賦し作る縉紳  
先生四十餘人丁列は是を繪  
圖して今乃世うり是を傳ふ  
右軍乃蘭亭叙といふ是なり  
其後唐乃太宗書を御とす  
前代乃法書を多く集らる

時、右軍乃蕭亭叙ハ神助  
ありと義之をうつぐらひそく  
是を秘藏して自ら是を  
なすむ所なり此  
草稿の真書をとらむに  
出せと  
救せらば時、十八學士乃中

蕭翼奏しし中、義之七  
世乃孫、智永あり此  
子辨才とい僧、今江南に在り  
此手傳りて秘藏す  
是を得て上らんと、此事  
石帖に記し、

乃真蹟を得て楮遂良虞世南  
顔真卿歐陽詢乃諸名公  
命せられ各々是墓にして百官  
は是を賜ふなり真蹟ハ崩  
御の時遺教よりて昭陵  
同葬とせよあるハ諸名公乃

摹本なりと云ふある處  
大概ありて如此

唐土ハ學をんちりてなるに嚴整  
し利口發明ぐりてはよりさ  
あはれ舉任及第乃月と年と上中下  
乃次第をありて是れ文其詩を



書ハ子及公等々々を議論し  
竹方官人天子より諸侯大夫より  
それく乃文官是をたし名ら公  
七極々末乃人といふ三公乃職  
乃乃乃乃日本よそ書をとよむ人  
ハ云々此事を詳々志事なり文

詩もこれ撰ひある今日本も大  
乃家集も唐も韓公宋も蘇公を  
をあるぬかをしとよやう成り  
竹方なりこれらら著述乃多  
を大家といふ富字此事もあり

明乃四大家と  
明王履吉董其昌乃四公なりとハ曰  
本人も能く是をいふ大官又し  
て重き人となりやれらるるは  
あますれあしぬけなれは物  
よあらん回し極くさるるは

やうであらうなるものなりすこ  
詩を文をいふは韓公柳公杜  
公王公此なりは極くあら  
なる學者もあやうなるは是  
ぬしなるは者なりよ  
向事なりは學者なり

本按あるなりよりんこれ本  
その按とまふをふを容易よ  
蹉道しゆるときハ穆古のつま  
たふなり是ハ依彼に依ると不  
なり情書寫字ハ事難し  
易易として難よくくうつま

とハ遍神を得たりハ遍真といふ  
より自己ハ氣息とありし  
物をよしとすゆしつらま  
似たりを書奴といふ人の  
一氣象乃を大章とすたなり  
穆古不實ありてあやしき

くまをきいしゆるまをなると  
多しあぬ志はあもせんなれど  
も識者乃そしをまぬはる  
以大鼓つとを管をもえしめ師訓  
を修むやんて十年く熟しゆる  
上うそえ乃人乃一種乃れ自然

とあはしゆるハ格別藍ハ藍より  
いざり藍よりもあしとつみ  
大事乃場あなりこれゆる  
稽古之しめり事と成しゆる  
あろをきしゆるあろ  
あろし

雪舟を画工乃抄く思ふ人なり  
画工ハありて臨濟流乃衲子なり  
東海道五十三驛乃向く駿河國  
奥津ト云所く清見寺ト云禪院  
ありて乃寺乃歴代任職せし  
人なり元乃比ハ和僧乃入唐せし

事ノ年々乃事ありして曹洞宗  
永平南山道元禪師カキテ入  
唐乃時西湖ト云所して瀬戸  
首四郎ト逢着し得る事佛法傳  
授乃ありて陶器磁甕乃事を  
凡各々入唐傳法ト乃事ト永平

禪師乃正法眼藏くわしを業記  
なまなり雪舟和尚もあり今  
乃世よ長谷川と名字しなり雪  
舟乃画法を海ふものといふ雪舟  
雲谷禪師なり長谷川雲谷と  
よまのいふぬま正統ハ長門乃

國よあるる谷 此印を取持しなり  
長州よありなり是を正統  
とすなり

先師陶齋翁所嘗手自劄記  
者數卷。余偶探某遺篋中而獲  
之矣。什襲珍重，拱璧不翅也。乃  
就其中摘若干首，字之，從而摸  
寫之。毫釐不差，以為一小冊子。

此乃法帖... 卷之... 國子...

是則桂林一夜崑山片玉已  
豈足以盡翁哉聊以欲供接  
客話柄之資耳蓋公翁生平  
胸次磊落迥出風塵表是以  
其揮毫之際龍奮鳳蟠之

妙自有不可端倪者焉古  
人有言曰書心畫豈為以誣  
我十年十日想知余非阿所  
好也

文化七年庚午秋



浪華

村上恒菴謹識



嘉永二年己酉八月

江都 菅氏函湖暮



